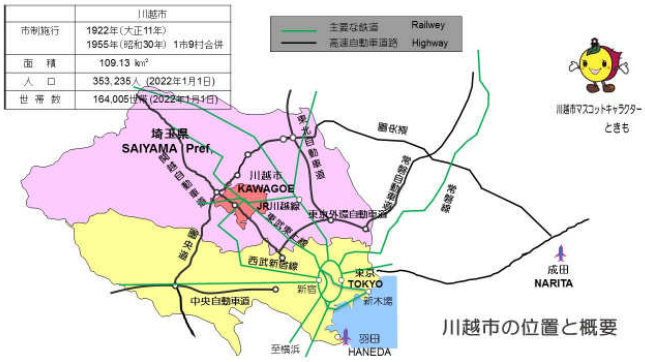
【③川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて/街並とその現代的活用】

荒牧澄多（川越まちづくり NPO 役員、蔵の会）

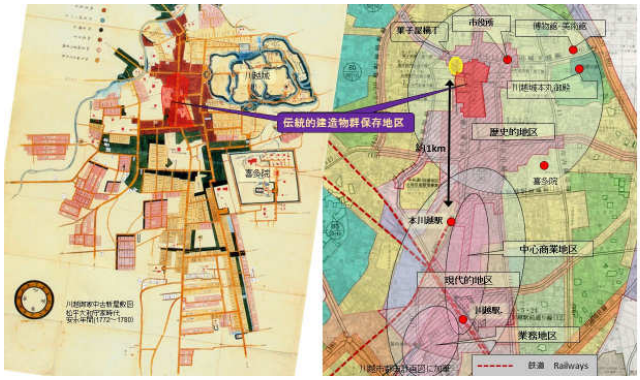
市民が主体的に関わって歴史的資産を活かしたまちづくりを進めている日本の川越の町について報告します。左奥に、日本のシンボルである富士山が見えています。手前の低い屋並が伝統的建造物群保存地区です。中央に、川越のシンボルである時の鐘が見えます。時の鐘は、時計がない時代、川越の町に時刻を知らせた鐘を突くために建てられた鐘楼です。

日本には、国の文化財保護法によって守り伝えられている伝統的な町並み保存地区が、現在 126 地区あります。これは、その位置を示したもので、川越は、日本の首都である東京にもっとも近い場所にある保存地区です。

東京との関係を示しています。都心から、さまざまな交通機関を使って約 1 時間の距離にあります。また、高速道路からのアクセスもよく　成田空港や羽田空港などの国際空港からも 2 時間程度の距離にあります。都市の規模は左上の表をご覧ください。面積は約 109 平方キロメートル。人口は約 35 万人です。



川越の中心市街地を見てみましょう。左側は 18 世紀後半の地図、右側は現代の地図です。右側の地図で見ると、町の北側の地区が、歴史的なエリア。南側の地区が、現代的なエリアになっています。鉄道の駅ができた南側が近代になって大きく変わり、武家地から商業地に変わったほかは、商業地や住宅地などの土地の使い方は、近世の都市が基盤となっています。伝統的建造物群保存地区は赤いエリアになります。

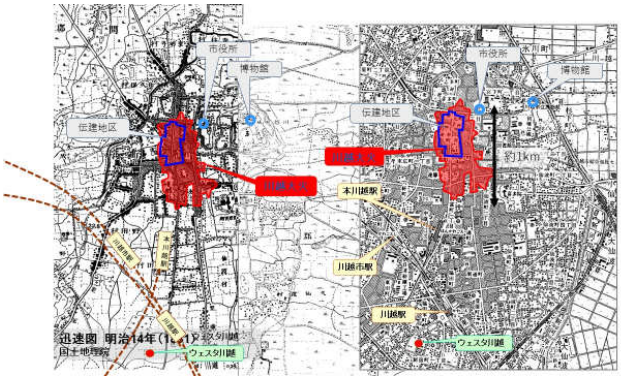


それでは、伝統的な町並み以外の歴史的資源を見てみましょう。喜多院や東照宮という近世の江戸幕府（徳川家）ゆかりのお寺や神社。ともに国指定の重要文化財です。氷川神社は、中央の写真の祭礼の中心となる神社です。ちなみにこの山車は、私の住んでいる自治会の所有です。右下の写真に見えるようなお城の御殿建築も残っています。右上の写真の菓子屋横丁は、町並み保存地区に隣接する、子供向けの昔ながらのお菓子を売るお店が、集まっている小路です。
川越祭りは、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。この祭りは、川越最大の祭りで、町の人や職人、近隣農村部の方など、近世の川越の経済圏の縮図ともなっています。コロナ禍前は、祭礼の二日間に約 100 万人の見物客が訪れていました。

一方、鉄道駅のある南側の市街地エリアはというと、ごらんの通り、高層のビルが立ち並ぶ、現代都市です。中央上の写真の商店街は、コロナ禍以前に撮ったためマスクはしていませんが、今も人出は変わっていません。地方都市の中でも最も栄えている商店街です。この地区では、今も高層住宅の建設が続いています。

今のまちづくりにつながる歴史を簡単にご紹介しましょう。1457 年にお城が築かれます。
背景の写真ですが、19 世紀半ばに建て替えられた川越城の本丸御殿です。1638 年に大火があり、何枚か前のスライドでお見せした町の都市計画の基礎がつくられます。そして 1893 年の大火で、今の町並み景観が生まれます。

左側は、1881 年の地図です。右側は、現代のものです。このエリアが火事で焼けてしまいます。当時の川越の町の全戸数の 40%弱が焼失しました。しかし、中心商店街の面積からするとその 60%近く焼失したのではないでしょうか。
この大火の後に復興した町並みが保存地区になります。このあたりです。

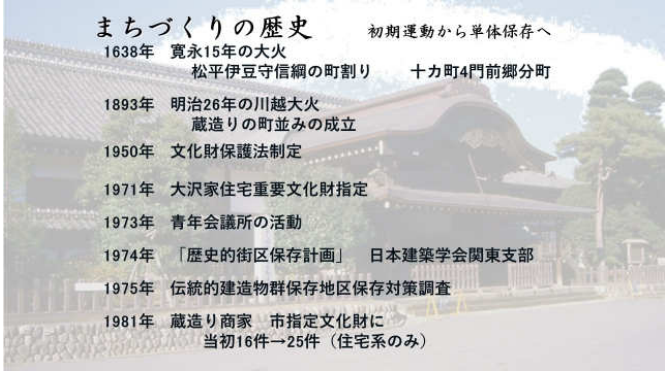


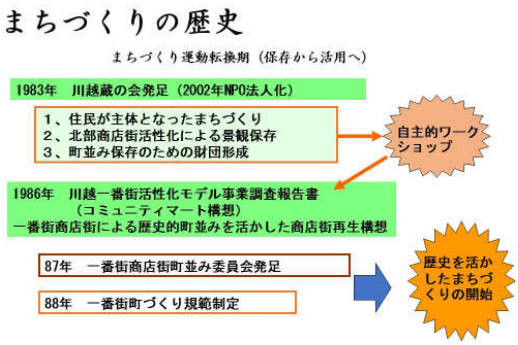
1893 年の大火から数年たった川越の町並みです。「蔵造りの町並み」と言われています。
この蔵造りという建築様式は、木の軸組構造の上に、何回も泥を塗り重ねて作ります。1923 年の関東大震災より前の東京は、このような建築がたくさん建っていましたが、地震とその後の火事、そして戦争によってすべて失われてしましました。川越には、日本の首都東京の歴史的景観を残す町としても有名です。

1893年の大火後の蔵造りの町並み

1900頃

さて時代は下りまして。1971 年に 1794 年に建築された大沢家住宅が国の重要文化財に指定されます。川越の人にとって、身近すぎてその価値がわからなった「蔵造り」が国の文化財として指定されたことによって、その価値に気づくことになります。1973 年には、外部の専門家たちからの示唆もありましたが、川越青年会議所が、蔵造りの町並みの保存方法を考えます
1974 年には、日本建築学会が川越の歴史的な町並み保存についてのアイディア設計競技会を開催します。1975 年には国の補助金をうけて、町並み保存に関する調査を行います。しかし住民の賛同を得ることができなかったので、保存地区にはなりませんでした。1981 年には、町並み保存地区にできなかったので、川越市が独自に文化財に指定し守るようになりました。





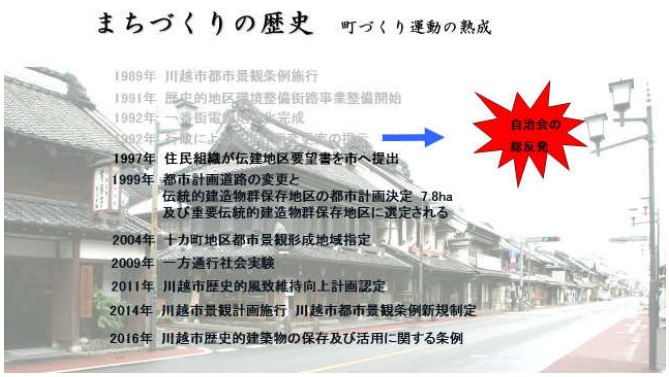
川越のまちづくりが市民が主体となっていく過程をみてみましょう。1983 年に蔵造りの街並みが残る地域の若手商店主や、蔵造りの町並みに関心を寄せる広範囲な市民、そして専門家が「川越蔵の会」を結成します。そこでは、住民が主体となったまちづくりを標榜にかかげ、市民と専門家が一体となって自主的にワークショップを始めます。そこで議論されたことを、ワークショップに参加した商店主たちは、商店街に持ち帰り、国の補助を受けながら、商店街にふさわしい方策を検討していきます。そこで生まれたのが、自分たちで町並みをコントロールする組織「町並み委員会」とまちをよくしてい

くためにルールである「まちづくり規範」です内容は後でご紹介します。ここから、歴史的資産を活かした住民主体のまちづくりが本格的始まります。

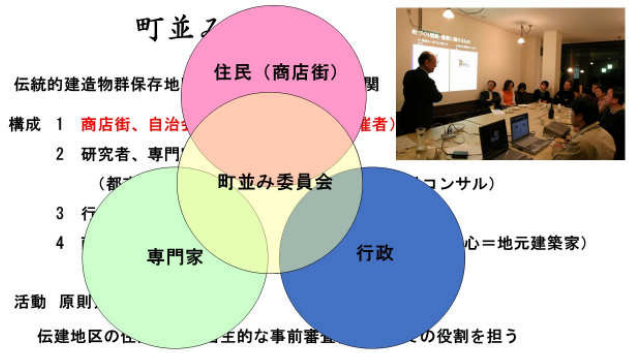
これに呼応するように、川越市役所もいくつかの方策を導入します。町の景観を守る条例をつくり。細街路の路面整備をします。日本の町では、道路の上空に多くの電線が張り巡らされていますが、それらを道路の下に埋めました。町がきれいになるにつれ、多くのお客さんが来るようになりました。そこで市役所は、町並みを守る方策を住民に提示したのです。しかし、住んでいる方々から反発を受けました。その理由は、一つには、市役所からの一方的な提示であり、住んでいる人の意見が反映されていないというもの。もう一つは、お客さんが来るようになって商売をしている人はいいのですが、商店の金儲けのために町を守るのはおかしいというものです市役所は、自分たちの提案を撤回することになりました。

市役所の提案を撤回させた住民ですが、このままでは、自分たちが住み続けたい町にならないと考えた住民がいました。そこで、地域の基本的なコミュニティである自治会の方々が、まちづくりを勉強する組織を作ります。十カ町会です。当初 11 の自治会、のちに 12 の自治会の集まりになります。そこで、町を再認識することから始まり、どうすれば、歴史を感じながら住み続けられるまちができるかを議論していきます。

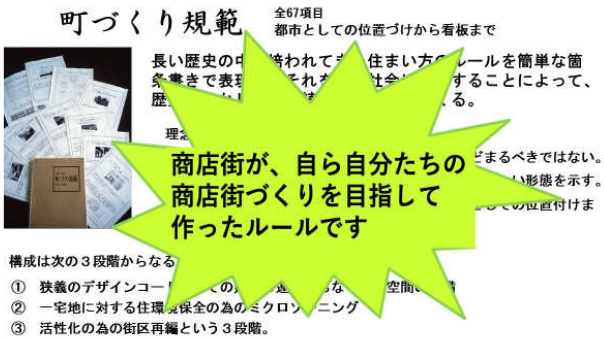
その結果、自分たちの町で一番大事にし、後世に伝えていかなくてはならない地域を国の保存地区にして、その周辺は、川越市の方策を取り入れた緩やかなまちづくりをしようということになりました。その後、歴史的町並みの中心部は、国の町並み保存地区になり、周辺部は歴史を生かしながらも緩やかな規制がされている地区となりました。この地区のメインストリートは、車と人が複雑に交錯する道です。まるでスークシラーハみたいに。あまりにもあぶないので、自動車を一方通行にする実験も行いました。しかし、住民の合意を得られず、まだ、実現していません。その後、川越市は、歴史的町並みを維持していくためにいくつもの方策を導入しつつ、今に至っています。



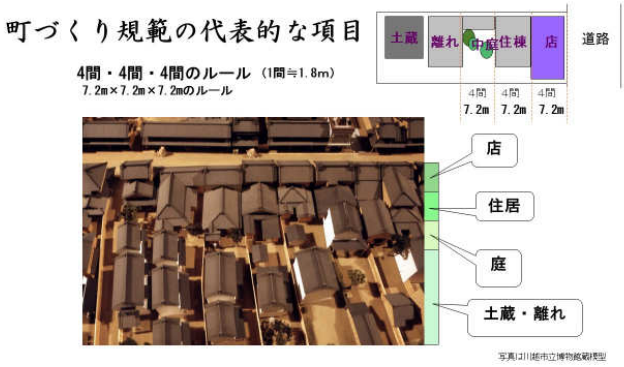
では、先ほどお話に出てきた「町並み委員会」について説明いたします構成メンバーは、商店街や自治会などの地域に住んだり、商いをしている方々の代表。次に、専門家。大学の先生や都市計画コンサルタンツなど、都市計画や建築の歴史の研究者です。そして、行政は基本的にはオブザーバーとして、保存地区の建築行為を許可する時の有力な判断材料にします。最後に、商工会議所やまちづくり市民団体である「川越蔵の会」のメンバーです。この会は、保存地区内の行為に市役所が許認可する前の、住民自身による審査機関となっています。ここでの決定は、強制力はありませんが、許認可権限をもっている市役所では、もっとも重要な参考意見としています。また、コミュニティとしての強制力が無言のうちに働いているような気がします。この図のような関係です。



続いて町を作っていくためのルール「まちづくり規範」についてお話しましょう。この町で、長い歴史の中で培われてきた住まい方のルールを簡単な箇条書きで表現し、それを現代社会に応用することによって住み続けられる町を作ることを目的にしています。理念として　外観だけではない規制のありかた。数値制限ではなく望ましい姿の提示。ここの地区だけでなく都市全体の在り方のから考える。そして、構成として、道路に面する個々の建物整備に始まる街路空間の整備。一宅地の整備。街区の整備。というように、いくつかのレベルでの提案をしています。ここで重要なのは、担い手が、このルールの策定にかかわり、担いてが納得し、担い手が使いこなせる内容になっていることです。当然のことながら、この策定には専門家の関与が欠かせませんでしたが。商店街が、自ら自分たちの商店街づくりを目指して作ったルールです。



ルールの代表的なものとして４間・４間・４間のルールがあります。１間とは日本の伝統的な長さの単位である約 1.8m。従って４間は約 7.2m になります。間口が狭く奥行きが長い日本の伝統的な商家の敷地はこの図のように使われることが多くあります。１軒１軒のゾーニングが連続することで街区内に中庭の連続が生まれます。街区内のグリーンベルトです。これが通風や採光といった個々の住宅の環境を守る空間へと変わります。



町並みは生き物です。川越の町並み景観の変化をみてみましょう。今から 44 年前は看板で古い建物を隠していました。伝統的な建物は、古臭く汚らしいと思われていました。その 10 年後、市の文化財に指定された時にとりあえず看板を塗り直しました。そして看板を外し、建物を昔の姿に戻しました。しかし店舗内装は歴史的な重みを感じられる現代店舗にしています。そして電線を地中化し、さらに街路灯を新しくするとともに歩道部分を石畳にしました。川越では歴史的な町並みを守りながらも、変えていいものは現代の要求に合うように更新してきました。

町並みの移り変わり　一番街

ここで最近の事例をご紹介しましょう。町並み保存地区のすぐ北側でのリノベーションの事例です。通称「弁天横丁」と呼ばれる一角に建つ長屋の改修事例です。

ここは、蔵造りの町並みができるきっかけとなった 1893 年の大火の後にできた小路です。芸者が住んでいた置屋街でした。その後、芸者の仕事を辞めた方々が、飲食店を開きます。しかし、その後、飲食を開いていた方々もいなくなり、空家となっていました。今回ご紹介するのは、左下の写真の長屋が舞台です。ちなみに、上の写真に着物姿のお嬢さんが写っていますが、彼女たちは芸者ではなく、日本の伝統的な衣装である着物を、レンタルで借りて街歩きを楽しんでいる観光客です。日常生活で着ることが無くなった伝統的な衣装を、川越を訪れることによって楽しんでいます。これも一種のコスプレでしょうか。

この長屋、最初は 1893 年の大火からほどなく建てられた、織物関係の市場だった可能性が指摘されている建築です。市場の閉鎖後は、住居、そして芸者の置屋、飲食店を経て永らく空家になっていました。そこを、まちづくり市民団体である「川越蔵の会」が建物所有者から借り受けて、セルフリノベーションで改修を行いました。元は左上の写真のように白いブロック塀で覆われていました。古い時代の構築なので、地震がきたらいつ倒れてもおかしくないようなものでした。逆に、古すぎるがため壊しやすかったのですが。

まちづくり市民団体とその運動に関心を持った人々が集まり、改修工事を行いました。まずは、解体。いらない内装を壊します。そして、新たな内装を施します。漆喰壁も塗りなおしました。素人なので、きれいに塗れないのは当たり前。その下手さが、味わいに変ります。壁紙も、みんなで張りました。なお和紙はユネスコの無形文化遺産に登録されたものを使っています。子供も一緒に作業しています。オープニングでは作業風景をパネルにして展示しました。そして、川越で活躍されている陶芸家の展示販売です。参加者みんな満足げな表情です。

この長屋に入った方々は多彩です。入居条件としてアートクラフト系など新しい文化を発信してくれそうな方を選びました。東京から川越に来られた方、古い建物だからこそ創作意欲を駆り立てられる方。先日は音楽とペインティングのパフォーマンスも開かれました。落語会を開いたこともあります。おじさんたちが愛した飲み屋がなくなった今、この長屋は新しい道を歩み始めました。世代を超えたコミュニティも生まれ始めました。

昨年この周辺に位置する喜多町自治会では新たにパンフレットを作成しました。このコミュニティに暮らす人々に地域の歴史や文化、祭礼行事等を知って頂くためのパンフレットです。このようなパンフレットを作ることによって自分の住んでいるコミュニティを知って、好きになってずっと住んで頂くための一手法です。

そこに住まう人々が地域のまちづくりに主体的に関わることにより、地域資産を生かした持続可能なまちづくりを進めることができます。そこでは、市民は市民として、専門家は専門家として、行政は行政としての役割を理解し、それぞれが責任をもって活動することにより、より良いまちづくりを進めることができるでしょう。これで私の報告は終わらせていただきます。川越の事例がすこしでもカイロのオールドシティの皆様のお役にたてれば幸いです

そこに住まう人々が地域のまちづくりに主体的に関わることにより、地域資産を生かした持続可能なまちづくりを進めることができます。

そこでは、市民は市民として、専門家は専門家として、行政は行政としての役割を理解し、それぞれが責任をもって活動することにより、より良い、まちづくりを進めることができるでしょう。

おわり